伊賀流忍者博物館蔵
忍術史料叢書

伊賀流忍術隠之巻

伊賀流忍術隠火之巻

【緒言】

近年、忍者・忍術に関心をもたれる方々が、国内外ともに増加してきている。一方において、忍者や忍術の実体は、必ずしも世間に理解されている訳ではなく、誇張されたり誤解されたりして、事実とは随分かけ離れた姿として認識されているのではないだろうか。

今まで多くの諸賢により、その歴史や技術等を研究し発表されてきてはいるが、まだまだ正しく理解を得るまでには至っていないのが現状である。

伊賀流忍者博物館でも、忍者屋敷を中心として諸々の史・資料を一般に展示公開し、真実の忍者・忍術を追究して其の広報に努めてきたが、さらに研究家や好事家、興味をもたれる一般の方々などに一層の理解を深めて頂くため、当館所蔵の忍術文献史料を順次公刊していくこととする。

この史料は、忍術研究家・故藤田西湖氏の御遺族より昭和四十九年に御寄贈頂いた写本が大半であるが、経緯や文献の性格上、現在まで一般公開はほとんどなされていなかったものである。

既に公刊されている史料以外の、重要なまた興味ある文献を選定して、現代語訳や翻刻として発表していく予定である。(但し、火薬や種々の薬方等々、害があったり、悪用の危険性があると考えられるものは除外、又は略記とする。)

なお、故藤田西湖氏及び、この貴重な文献を御寄贈下さった藤田家の方々に衷心より感謝申し上げる次第である。

平成十六年四月吉祥日

伊賀流忍者博物館

伊賀流忍術隠火之巻

〔解説〕

この伝書は、伊賀流忍術として題が付されており、主に捕物用の道具類や松明などの照明具について、作製・使用方法等を簡略に図入りで記した解説本である。

同種のものに、尾張藩・制剛流武術の道具之巻や松明之方と称する秘伝書類があり図解等が酷似している。これにも道具名や松明の製法、薬方などが記されているが、内容については異なっている場合がある。どちらかが原典・出典なのか？それほど関係は無いのか？などについては今のところ明確には

分っていない。

制剛流伝書の中で、忍術よりの伝承を暗に示している部分があり、又これらの秘伝書と殆んど同一内容のものに、伊賀忍隠火之巻も残っており、何らかの関係が有ったと推測できる。全て写本年代もほぼ同一のようであり、原本がどれであるかも現在の所よく判らない。

因みに制剛流は、水早長左衛門信正を流祖とし、戦国末期から江戸初期に成立した、捕手や居合などを主とする著名な武術流儀である。南蛮一品流も同人を祖とする武術流儀である。

尾張藩の制剛流は史料も豊富に残っており、将来には忍術との関連が判明するかもしれない。

（参考史料として神道軍傳研修所蔵、制剛流秘伝書の一部を付しておく。）

〔凡例〕

【現代語訳】

一、この現代語訳は伊賀流忍者博物館蔵本を底本とし、他に神道軍傳研修所蔵の伊賀忍隠火之巻や、制剛流の伝書等を校合に使用した。

二、底本に出来るだけ忠実に口語訳するため、原文の趣きを変えないよう、可能な限り意訳を行わずに直訳するよう努めたが、通読の便を図るために後記のようにした。

① 文節は解り易いよう変えたり、任意に段落を付けて改行したり、句読点、濁点などは適宜追加した。

② 本字は略字に変え、通常は使用しない異体字は正字にかえた。

③　平仮名より解り易いものは漢字に改めた。また解り難いものはルビを平仮名で付した。

④　明らかに間違いの箇所は訂正して訳したが、不明なものはそのままとした。

⑤　現代人に解り難い語句については略註を後記した。

【読み下し】

① 伊賀流忍者博物館蔵本を底本として読み下しを行った。

② 底本にできるだけ忠実に読み下すため、用語・用字・振り仮名などは、原則的に原本通りとした。

③ 本字・略字・俗字等は、可能な限り原本通りとした。

④ 原本の用語・用字・振り仮名等に、写本時の誤字等や用語表現の誤りと思われる箇所があるが其の儘とした。

⑤ 原本には句読点が無いので読解の便宜上、必要と思われる箇所には一文字分を空けた。

【現代語訳】

百夜蝋燭方

藤田西湖遺書

鹿の角を蝋燭のように拵え、それから、其の蝋燭の入る位に見合わせた竹を切って、其の竹を二つ割にして挟み、其の上を藁で巻き、其の上を壁土のように煉った土で塗り、地面を掘って其の穴へ堅炭を入れ、其の四方に割木を四、五本箱のように並べ、其の上へ籾糠を一斗ばかり置き、其の上へ藁を置いて火を付け、濡れ菰を覆って蒸し焼きにして火の消える頃に取り出しナモミの油を引くこと十回、干してて引き干して引き、よくよく乾かして火口へ硫黄を少しだけ付けて燃やすのである。保つ事が百夜に至るという。極秘の伝である。

この図のように細い方は

竹を細く造るように。

鹿の角で図のように造るのである。

この図のように竹ではさむのである。

右のように藁で巻くのである

上下ともに土で塗りこめ、干して
黒焼にすると良い。

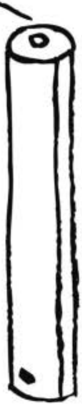
ナモミの油は薬種屋(やくしゅや)で求めるように。

右は百夜蝋燭の伝である。

早蝋燭之方（はやろうそく）

薄い紙を選んで其の紙に油を引いて、其の紙を五十回も百回も灸（きゅう）を縒（よ）るようにきりきりと巻いて、其の中へ細い竹を入れて巻いて後、其の中に巻き込んだ竹を引き抜いて、其の口へ火口硫黄を少し塗り、蝋燭のようにして其の上をまた厚い紙で一回張り、其の上を漆で一回塗ると良い。

細い竹を芯にして巻いて良く、後で抜き取るように。抜かずでも用いる。



竹を抜いた所に穴を明けるのである。其の所へ火口硫黄を付ければ良い。

竹剣（チツケン）方　またの名　ひご明松（たいまつ）

女竹（メダケ）を細く削って長さ二尺程に拵え五ケ所を結（ゆ）い、其の後、油を湿す事。竹に色の付くのを限度として雨風の強い夜にともすのに消える事がない。

ほくちの方

芋の茎をくすべ黒焼きにして、そしてまた艾（もぐさ）を白くなる程に能くよく揉（も）んで、右の黒焼きで艾の見えない程によくよく揉みつけて、ほくちに用いるのである。火のつく事は、はなはだ優れている。

懐中（かいちゅう）の燃火（ともしび）伝

図のように茶碗の中へ紙を二寸四方くらいに切り、真ん中を捻（ひね）り油の中へ入れ、捻った所へ火をともすと蝋燭のようにともるのである。

因酔（いんすい）方　龍頭（りゅうとう）という。

山吹のしべをとって六七寸くらいの輪に拵え、水の上に浮かべて、其の中へ油を入れ、燈心（とうしん）を入れ火を燈（とも）すのである。

夢想火(むそうび)の方

宝珠(ほうじゅ)の玉を唐金(からがね)で百匁玉(ひゃくめだま)ほどに、内を空洞にして
焔硝(えんしょう)　二匁　　松脂(まつやに)　二分　　硫黄(いおう)　二分
右の三種を粉末にして焼酎(しょうちゅう)で煉り固め、右の百匁程の玉の中へ硫黄を一回塗り、其の後に右の煉り固めた薬を、其の玉の中へつつき込んで火を燃やすのである。

出光方(しゅっこう)

玉子火とも云う。

ひづち藁を七日曝(さら)して綿のように打ち、よく干して常の藁で苞(つと)をこしらえ、其の内へ右のひづち藁を其の中へ入れ、また其の中へ下げ火を包み、風に向かって手の内で、其の苞を明け塞(ふさ)げるとやがて火が燃え付くのである。

強盗火　下げ緒火とも云う。

古い布を黒焼きにして十匁　引茶　三匁　胡桃の殻　一匁を黒焼きにして、右の三種を飯糊で固め、また其の上へ右の布の黒焼きをよく粉にして三〇回、衣に掛け、又、其の上へ明礬を十回程、衣にかけるのである。　口伝

水中火の方

水燈心と言う。

栗の花を採って陰干しにして、其の後ナモミの油を十回湿し、皿に水を入れ右の燈心を入れて燈すのである。

円火(えんび)の方

圓火(えんび)と云うのである。又

焔硝　五匁　　硫黄　一匁　　灰　一匁五分　　樟脳(しょうのう)　二匁

右の四種をよく粉にして、厚い紙で丸く紙袋を拵えて右の薬をつめこんで、前後の尖った針を挿して、抜けないようにして右の紙袋に口薬を指し、火を付けて暗い所へ投げ入れるのである。　口伝

胴火（どうび）

たらの木を生で二十匁黒焼きにして、女竹を黒焼きにして十匁、古い布に腐ったカンコを乗せ裂いたのを縒りにして、太い竹の筒の中へ右のつぎの縒(よ)りを入れ、其の後、二種の黒焼きをつつき込むのである。　口伝

魂手(こんしゅ)　埋(うず)み火とも云うのである。

是は行燈(あんどう)の火を伏せることである。

幅四寸の鋸(のこぎり)　長さ六・七寸

火口(ヒクチ)に細い竹を渡し、右の鋸を火の上へ被(かぶ)せるのである。　口伝

照砂（しょうしゃ）

皮で長さ六寸に、三匁五分の鉄砲の中へ入る程に縫い、其の中へ砂を入れ、後先（あとさき）をよく留めて、鉄砲薬を六・七分入れて右の皮を玉にして人質（ひとじち）を捕る者に打つのである。

又、藤の木を六寸にして中をひしいでも玉に用いるのである。　口伝

掌珠（しょうじゅ）

しょうじゅといって、是も六十匁の玉を手の内に持って、玉ばかりを打ちかけて捕る事がある。

村雨（むらさめ）

鉛を四分周りに六角に削り、其の後、三分程に筋交（すじか）いに百ほど刻み、其の後、五寸程の竹の筒の内へ右の鉛を入れて、五身伝（ごしんでん）にかかり撒（ま）く事がある。

口伝

魂飛（こんぴ）

六十匁程の鉛に穴を開け、それに三尺ほどの鎖を付け、早縄（はやなわ）の端に結び付けて打ち掛け、刀を取る事がある。

口伝

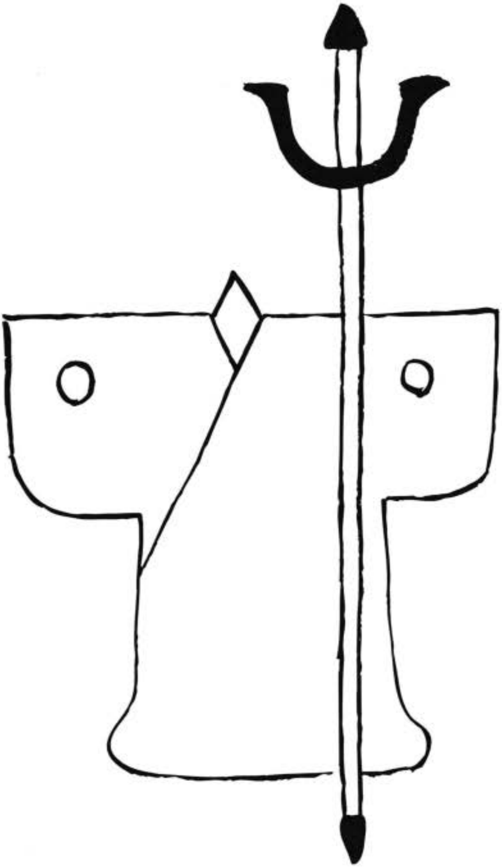
五輪くづし

紐は皮で作る。

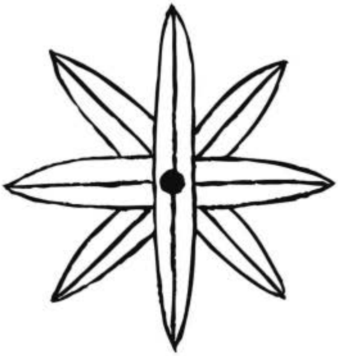
手の内、握りだけに作るのである。

口伝

繞（まとい）

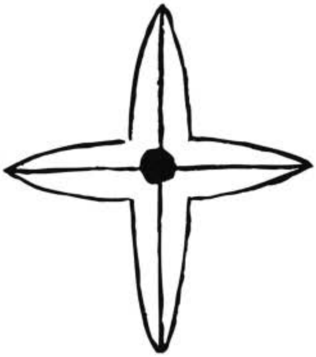


野中の幕と云う事がある。胴服（どうぶく）を片手に下げて、刀を抜いている人に打ちかけて捕ることがある。　口伝



八方手裏剣

手裏剣

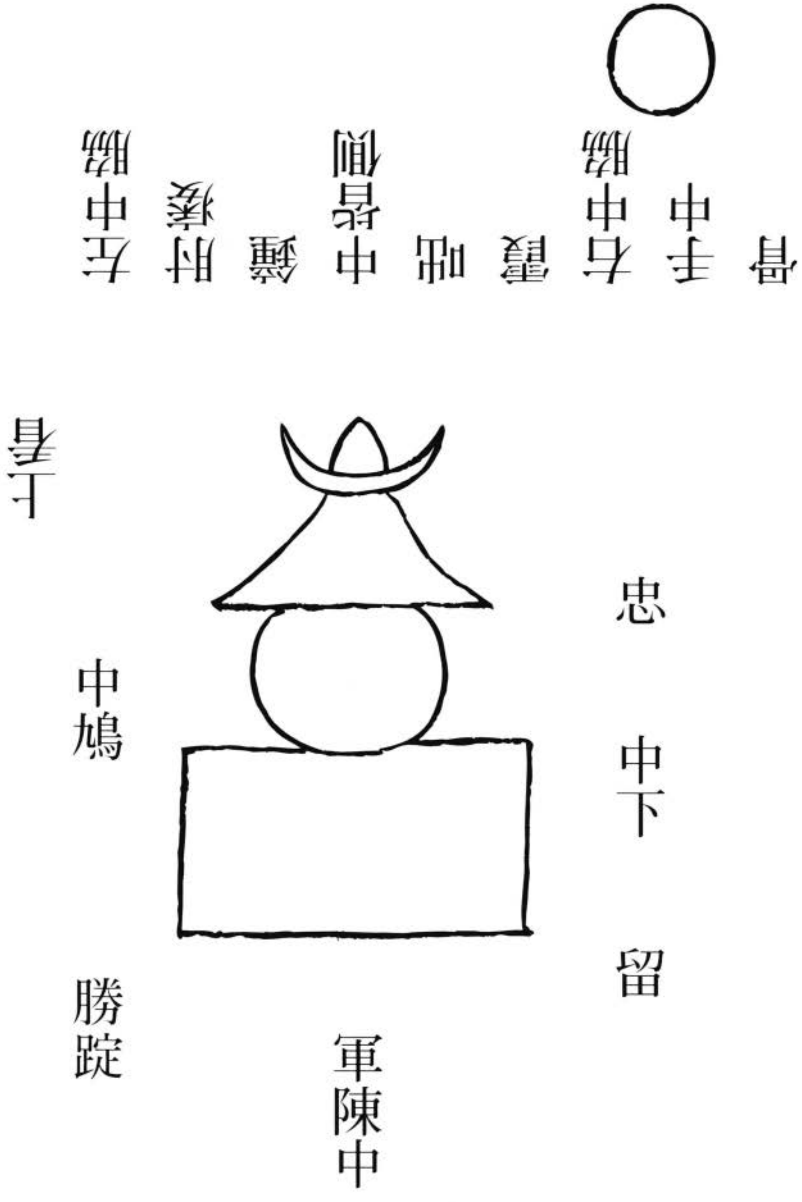


四方手裏剣

痿（なえし）

角手（かくて）

十手（じって）



忠
中下
留
中鳩
勝⿰⻊定
軍陳中

黄土

東
青　木

西
白　金

南
赤　火

北
黒　水

【略註】

1　百夜　多くの夜。（ここでは長い日時の意味）
2　堅炭　樫や楢を蒸焼きにして作った堅い炭。
3　割木　縦に割った薪。
4　籾糠　すりぬか。籾米の外皮。
5　斗　13・039ℓ
6　濡れ菰　ワラで織ったムシロを水で濡らし湿したもの。
7　蒸し焼き　ふすべ焼く。いぶし焼く。土器などに物を入れ密封して外から中にある物を焼くこと。また、そのようにして作ったもの。

8　なもみの油　オナモミともいう路傍の雑草で、夏に開花し棘のある実をつける。この実は漢方では蒼耳子といい、実より採取した食用油・灯火油で、中国では蒼耳油という。

9　火口　点火するための口。

10　硫黄　主に火山地方より産する黄色の物質（化学記号S）黒色火薬の原料。

11　黒焼　土製の容器などに、ものをいれて蒸し焼きにすること。また、その様にして作ったもの。

12　薬種屋　薬屋。

13　灸　モグサをよじって火を点け、人体を熱し行う漢方治療。

14　火口硫黄　火口に付ける点火用の硫黄。

15　漆　ウルシの木より採取する樹液で、主に伝統産業等に使用の塗料。
16　ひご　竹を割り細く削いだもの。竹細工等に用いる。
17　尺　30・3㎝
18　芋の茎　サトイモの茎を乾燥したもの。イモガラ。
19　くすべ　いぶす。
20　艾　ヨモギの葉を乾燥して作った綿のようなもの。
21　ほくち　火打ち等で点火し火をうつし取るための火種。
22　寸　3・03㎝
23　山吹　山野に自生して春に黄色の花が咲く潅木。
24　しべ　花の芯。おしべや、めしべ。

25　燈心　燈油にひたして火をともすもの。
26　宝珠玉　尖頭で、頭や側面から炎が上っている様を表す玉で、仏の持ち物。
27　唐金　青銅。
28　匁　3・75g
29　焔硝　硝酸カリウム。黒色火薬の原料。
30　松脂　マツの幹から分泌した黄色味の樹液。
31　分　一寸の十分の一。一匁の十分の一。
32　焼酎　米や麦などを原料としたアルコール度の高い蒸留酒。
33　ひづちわら　刈り取った後に生える稲の藁。
34　常の藁　通常に刈り取られた稲茎の乾燥したもの。

35 苞　ワラなどでできた容器と、その中に入れたもの

36 下げ火　下げ緒火のこと。

37 引茶　抹茶。

38 胡桃殻　オニグルミの実の殻。

39 飯粘　そくい。飯粒を練って作った糊。

40 衣にかける　粉などを、ものの外面にかけ、まぶすこと。

41 明礬　明礬石。(カリウムとアルミニュウムの硫酸塩鉱物)

42 栗の花　クリの木に六月頃に咲く臭いの強い花。

43 陰干し　日陰で干して乾かすこと。

44 灰　ここでは麻の黒焼。黒色火薬の原料。

45 樟脳　クスノキより製する芳香のある物質。火薬や防虫、医薬

等に使用。

46 口薬　火縄銃の発火用に使用する火薬。

47 たらの木　棘のある喬木で、初秋に白黄色の花が咲く。若葉は食用になる。また多羅葉の木も意味する。

48 女竹　シノダケ。竹の一種で煙管や笛などの材料に使用する。

49 カンコ　紙子。和紙の衣服。ぼろ紙や排紙。

50 より　よじったもの。

51 つぎ　布等を補いつないだもの。

52 挑燈　あんどん。紙を貼った枠で、中に油皿を据えて燈火をともす照明器具。

53 鋸　木などを切るための工具。

54　皮　動物の皮を剥いで作ったもの。
55　後先　前後のこと。
56　鉄砲薬　火縄銃で弾丸を発射するための火薬。
57　捕る者　拘束している者。
58　藤の木　フジの蔓。
59　ひしぐ　おしつぶす。
60　打ちかけ　強くかかる。
61　捕る　拘束する。
62　鉛　重くて軟らかい有毒の金属（化学記Ｐｂ）
63　五身伝　制剛流武術等でいう人体の攻撃法。
64　早縄　敵を速やかに捕縛するための縄や、その技法。

65　五輪　地水火風空を意味し、ここでは人体を表す。
66　手の内　握った掌の内。
67　幕　風や人の視線等をさえぎるもの。物の隔てや、装飾にする布帛。
68　胴服　羽織のこと。

伊賀流忍術隠火之巻

【読み下し】

百夜（モヽヨ）蝋燭（ラウソク）方

鹿（シカ）の角（ツノ）を　らうそくの　如拵（コトクコシラヘ）　夫（ソレ）より其らうそくの入程（ほど）に見合　竹を切て其竹を二つ割（ワリ）にしてはさみ　其上を藁（ワラ）にて巻（マキ）　其上を壁土（カベツチ）の如ねりたる土（ツチ）にてぬり　地を掘（ホリ）て其穴（アナ）へ堅炭（カタスミ）を

入　其四方に割木を四五本　箱の如くならべ其上へ籾(モミ)
ぬかを壱斗はかり置　其上へ藁(ワラ)を置て火を付
ぬれこもを覆(オホヒ)て　薫焼(ムシヤキ)にして火の滅頃(キヘシ)　取出
しナモミの油をひく事廿へん　干(ホシ)ててひき
干てひき　能々(ヨクヨク)乾(カワカシ)して火口へ硫黄(イワウ)を少しく付
て燃すなり　保事百夜(タモツコトモヽヨ)に至(イタル)といへり　極秘傳也

此圖の如く細き方は

竹を細く造るへし

鹿の角にて　圖の如く造なり

此圖の如く　竹にてはさむなり

右の如く　わらにて巻なり

ナモミの油ハ薬種屋にて
求むべし

上下ともに土にて
ぬりこめほして
黒焼にしてよし

右百夜蝋燭の傳也

○早蝋燭之方

薄(ウス)き紙をえらみ　其紙に油を引(ヒキ)て　其紙を五十へんも百へんも　灸(キウ)をよる如く　きり〳〵と巻て　其中へ細き竹を入て巻て後　其中に巻込し竹をひき抜て　其口へ火口硫黄(イワウ)を少(スコシ)くぬり　らうそくの如くなして　其上をは又厚(アツキ)き紙にて一へん張(ハリ)　其上をうるしにて一へんぬりてよし

細き竹を　しんとして巻(マキ)てよく
後(ノチ)　抜取(ヌキトル)べし　抜(ヌカ)ずにも用いる

竹をぬきし所に　穴
明くなり　其所へ火口
硫黄付てよし

○竹劔方　一名ひこ明枩

女竹を細(ホソ)く削(ケヅリ)て　長(ナカサ)二尺程に拵　五所結(ユヒ)　其後油しめす事　竹に色の付を度(カギリ)として　雨風強(ツヨ)き夜に燃(トホ)すに滅(キユル)事なし

○ほくちの方

いもの茎（クキ）を薫　黒焼にして　扨又艾（モグサ）を

白なる程に能々もみて　右の黒焼を以（モツ）て

艾(モグサ)の見さる程に　能々(ヨクヽ)もみ付て　ほくちに用
るなり　火のつく事妙也

○懐中(クワイチウ)の燃火(トモシビ)傳

圖(ヅ)のごとく　茶碗(チヤワン)の中へ紙を二寸四方位
に切　真中(マンナカ)を捻(ヒネ)り　油の中へ入　ひねりし
所へ火を燃は　らうそくの如くともれるなり

○因酔方（インスイ）

龍燈（リウトウ）といふ

山吹（ヤマブキ）のしべを取（トリ）て　六七寸位（クライ）の輪（ワ）に
こしらへ　水の上に浮（ウカメ）て　其中（ナカ）へ油（アブラ）を
入　燈心（トウシン）を入　火を燈（トモ）すなり

○夢相火の方

宝珠玉(ホウシユノタマ)を　唐金にて百匁玉程
に　内(ウチ)を空(ウトロ)になして
焔硝(エンショウ)　二匁　松脂(マツヤニ)　一分　硫黄(イワウ)　二分
右三味(ミシナ)　細末(コ)にして焼酒(シャウチウ)にて煉(ネリ)
堅(カタ)め　右百匁程なる玉の中へ　硫黄(イワウ)

一遍塗(イッペンヌリ)　其後　右煉堅(ネリカタメ)たる薬を　其
玉の中へつつきこみて火燃すなり

○出光方（シュッコウ）　玉子火ともいふなり
ひづちわらを七日さらして　綿（ワタ）のごとくに
うち　よく干（ホシ）　常のわらにて苞（ツト）をこしらへ
其内へ右のひづちわらを　其中へ入　又其中
へさげ火をつつみ　風に向（ムカッ）て手の内にて
彼苞（カノツト）を明塞（アケフサゲ）ば　則（ヤガテ）火燃付（モヘツク）なり

○強盗火　さけお火とも云
古き布を黒焼にして拾匁　引茶三匁
胡桃殻一匁黒焼にして　右三品を飯
粘にてかため　又其上へ右の布の黒焼を
細末にして二十遍　衣に掛　又其上へ明礬
を十へん程　衣にかけるなり　口傳

○水中火の方　　水燈心と云

たりの花を菜（トリ）て乾（カケボシ）にして　其後なもみ

の油を十へんしめし　皿に水を入　右の燈

心を入て燃（トモ）すなり

○円火（エンビ）の方

圓火（エンビ）と云なり又

焔硝(エンシヤウ)　五匁　硫黄(イワウ)　壱匁　灰(ハイ)　壱匁五分
樟脳(シヤウノウ)　二匁　右四味　細末(ヨクコ)にして　厚(アツ)き
紙(カミ)にて丸く紙袋(カンフクロ)を拵(コシ)へ　右の薬を包(ツメ)
込(コメ)　前後(アトサキ)の尖(トガリ)たる針(ハリ)を指(サシ)　抜(ヌケ)さる様(ヤウ)に
なして　右の紙袋に口薬(クチクスリ)を指(サシ)　火を付て
闇所(クラキトコロ)へなけ入るなり　口傳

○胴火(トウヒ)

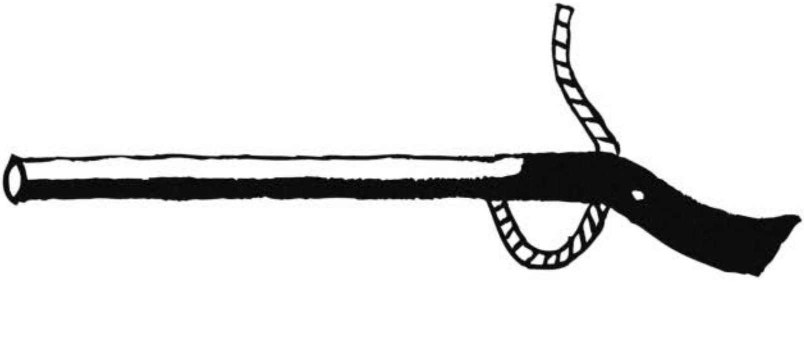
たらの木を生にて廿匁黒焼にして
女竹を黒焼にして拾匁　古き布(ヌノ)にくさ
りたるかんこのせ　さくをよりにして太竹(フトキタケノ)
筒(ツヽ)の中へ　右のつきのよりを入　其後二色(ソノノチフタイロ)の
黒焼をつき込なり　口傳

○魂手（コンシュ）　うづみ火ともいふなり
是は挑燈（アンドウ）の火を　ふする事なり
幅（ハバ）四寸の鋸（ノコギリ）　長（ナガ）サ六七寸
火口（ヒクチ）に細竹（ホソキタケ）を渡（ワタシ）　右の鋸（ノコギリ）火の上へかふす
るなり　口傳

[redacted]

○照砂（シャウシャ）

はいにて長六寸に　三匁五分の
鉄炮の中へ入程にぬい　其中へ
砂を入　あとさきを能留　鉄炮
薬六七分入　右の皮を玉にして
人質（ヒトジチ）を捕（トル）者に打なり
又　藤の木を六寸にして　中を
ひしぎても玉に用るなり　口傳



○掌珠（シャウシュ）

しやうしゅとて　是も六拾匁の玉を　手の内に持て　玉斗り打かけ捕事あり

○村雨（ムラサメ）

なまりを　四分まはりに六角にけづり
其後三分程に　すしかひに百程きざみ
其後五寸程の竹の筒の内へ　右のなまり
を入て　五身傳にかかり　まく事あり　口傳

○魂飛（コンヒ）
六拾匁程のなまりに穴をあけ　夫に三尺程のくさりを付　早縄（ハヤナワ）の末に結付（ムスビツケ）て　打掛刀を取事有　口傳

五りんくづし

手の内握（ニギリ）
だけに作也

ひもは皮にて作也

口傳

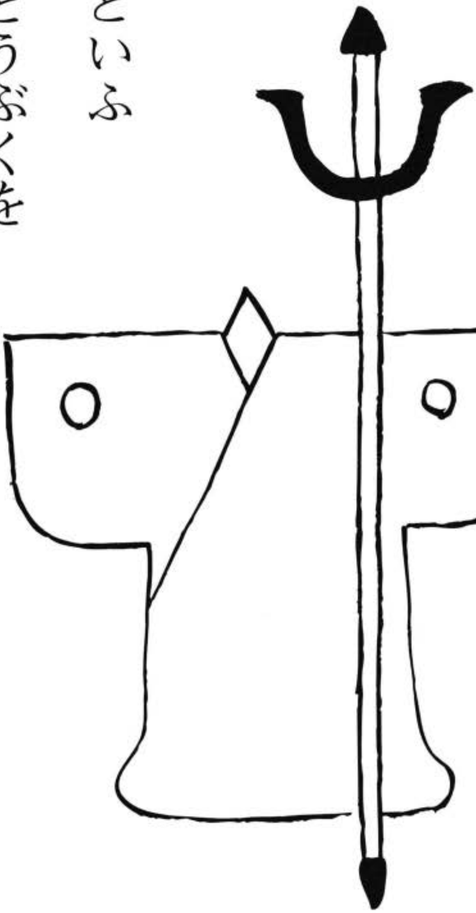
○繞（マトヒ）

野中の幕といふ

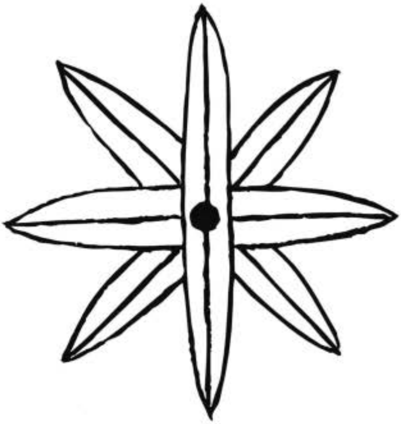
事あり　とうぶくを

片手にさけて　刀抜たる人に打かけて

捕事有　口傳

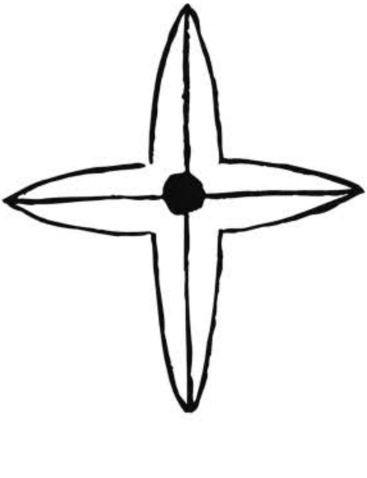


八方手裏剱



手裏剱

四方手裏剣剱



痿（ナエシ）

十手（ジッテ）

角手（カクテ）

忠
中下
軍陳中
勝

西

金 白

北

水 黑

黃土

南

火 赤

東

木 青

藤田西湖

【参考史料】

制剛流武術伝書

○道具之巻（部分）

道具之巻

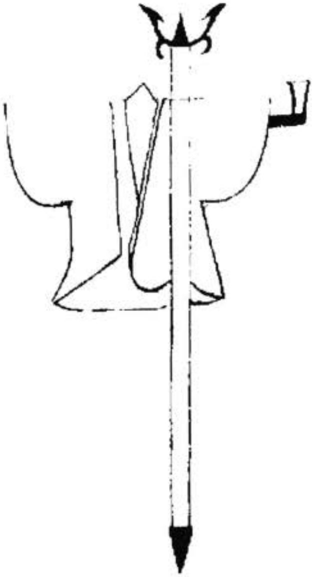
出光

掌珠

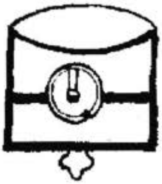
角手

痿
十手
村雨
魂飛
魂平

繞



強盜火



円火

照砂

水中火

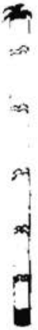
夢想火

困醉

早蠟燭

百夜蠟燭

竹釵



○制剛流秘極之巻（部分）

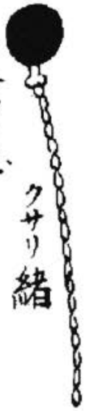
クルロシメニシクル〱トマハルヤウニシテ火サラヲ重クシ猶炮丸ヲ付上ニ火譎ノウスキカネアチ右筒クルロカケニ仕付底ノ処ニ十文字ノ木ヲ付夫ヱ柄ヲ仕込ムナリ口傳ヲ

竹釼　此道具ハ仕込杖ニヒトシ内ニ仕込ノ鎖杖アリ或刀ヲ抜持居者ヲ取ニハ面　擧ヲ打テ取ルナリ思ハサル処ヲ出ル故ニ敵ニヒルミ付其処ヲ取ナリ

如図カシノ木ヲ以テ丸クシ内ヲクリテウツロニシテ口ト本ヲ鎖ニテ張ル中ノトコロ籐ヲ以テ三処巻内鎖ノ棒ヲ仕込ム也先ニテ口カネノ処ニテ留ル様ニシテ横ヘ角ヲ出シテ置也

又一品ハ長一尺五寸斗ニシテ用コシラヘヤウ右同シ

魂飛（コンヒ） 此道具ハ取者ノ時面テイヲ打或白刃ニテ向フ者ヲ取ルニ此ノクサリヲ刃ニカラミ取ル事ナリ其外色々虚ヲ付テ打玉トイフ是ナリ



此レ如図ナマリ玉ニクワンヲ付クサリノ五尺余成ヲ付ナリ

玉ハ錬炮（ナマリ玉）ノ十匁玉程ニシテクワンヲ付ウルシニテヌリテ用口傳ヲタシ

魂平 此道具モ右ニ同シ打之テ敵ニ虚ヲ付テ取ル或ハ白刃ヲカラミ取ルニヨシ是ハ角アル故ニ當リ強クシテ痛打ツエヘニ強者ヲ取ニ用ソカシ其外口傳

圓火 此道具ハ夜中家ノ内ニクラキ処ル捕籠者ヲ取ルニ此圓火ヲ以火ノアカリニテ見取ルナリ座中ヘナゲ入レ

○松明之法（部分）

トホス
山吹ノシンヲ取テ六七寸輪ニ趣水ノ上ニウカメテ其内ヘ　リウトウ
油ヲツキ短心ヲ入トホス口傳

下緒火

古布ヲ黒焼ニシテ十匁其後ノ布十匁引茶三匁桃ノカワ黒焼一匁

右ノ布ノ黒ヤキト引茶ト桃ノカワ黒ヤキト此三色食粘ニテカタメ其上ヘ右ノ布ヲ能ク粉ニシテ廾返程衣ニカケ其上ヲメウハンヲ十返程衣ニカケル口傳

煑紙子黒焼　十匁　引茶　一匁五分

右粉ニシテウスノリニテネリタドンノコトクニ丸シ其上ヲメウハンノ生ノ粉ニテ四五返ヌル但食ノ取リ湯ニテ引キメウハンノ粉ヲヌルヘシ其上ヲ紙ニ廻火ヲ付ケ下緒ニユヒ付ケ用ナリ

埋火

行燈ノ火ヲフウズル事ナリ巾四寸程長サ六七寸ノ銛ノコトキ狹カネ火ノ口ニ横渡シニホトキ竹箸ヲ渡シ右ノ銛ヲ火ノ上カブセテ置口傳

又云行燈ノサラノ上箸横渡シニケヌキノ口ヲ火ノ處ニハサミシ様ニ置キ其上ニ錢壹文置事アリ

生脳　五匁

早蠟燭

硫黄　三匁

焔硝薬　五匁

ウルシノカス　五匁
右細ニシテ蠟燭ノコトク拵テ可燈

百夜蠟燭

鹿ノ角蠟燭ノコトクニ削リ馬小便ニ入テ十四五日ヒタシ
取出シ又我小便ニ百日ヒタシ取出シ角ノ上ノ内ヘナモミ
ノ油ヲツギ込能クシマシテ用時蠟燭ノコトクトホシ申ナ
リ

同

鹿ノ角ヲ蠟燭ノコトク拵ラ其上ヲ能竹ニテ切合セ廻ノ其
上ヲワラニテ巻土ヲヌリ黒焼ニシテナモミノ油ニシメシ
テ又シメシテハ干ユ十返モ付其後トホス

挍火

塩硝 五匁 硫黄一匁五分 灰一匁五分 生脳二匁
右ヨク粉ニシテ厚紙ニテ丸ク紙袋ニシテ右ノ薬ヲ包込其
後後先トガリタル針ヲサシ抜サルヤウニシテ右ノ紙袋ニ
口薬ヲサシ火ヲ付ケ闇クラキ取投入捕ル中事有口傳

玉子火

ヒ去ヲ七日サラシ其後能ホシ其後常ノワラニテツトヲシテ
其内ヘ右ノヒ去ヲ入其中ヘ下緒火ヲ包ミ風向テ手ノ内ニテ
ツトヲアケフサギスレハ則火モエ出ル也

ホウシノ玉

塩硝 二匁 硫黄 二分 灰一分 生脳二分
松脂 二分 引松粉 二分 蝋黄一分 引茶一分
艾葉 二分

終り

発　行　伊賀流忍者博物館
発行日　平成十六年四月
文　責　川上仁一

発　行　伊賀流忍者博物館
発行日　平成十六年四月